

IT企業の現場から

<1>

インターネットが国内に普及し始めたのは1995年ごろのこと。以来わずか13年間にネットの進化と普及がもたらした産業や社会の変化のすさまじさは、いうまでもない。いまも新しい概念や技術は目まぐるしく出現している。ここでは、ITが向かう未来と、この時代の組織運営について、とある現場の見方を紹介してみよう。

◇ ウェブ、メール、検索エンジンによる変革と破壊は、まさにすごいひと言。中でも特筆すべきは「サーチエコノミー」という言葉を生むほど力を持ったグーグルのパワーと「Web2.0」に象徴される新たな潮流だろう。

グーグルの力の源泉は、優秀な検索エンジンとそこで動く検索連動型広告の収益力だ。

「検索キーワードという庭」に置かれた無数の「寶銭箱」からの莫大な収入をテコに、周辺サービスを開発・買収し、いまやマイクロソフトやヤフーを脅かすまでの存在になった。当初はグーグル経営陣ですら、ここまで覇権的なサービス産業に成長するとは思っていなかったという。まさに、既存マスメディアの広告費を負担できない企業や組織に広告の機会を与えた報酬とっていい。広告のパラダイムシフトである。

「オープン」「パブリック」「フリー」のコンセプトに基づく無制限の情報流通により、個人と組織は表現機会を与えられた。動画やブログの自由流通で、マスコミが報じることのできない覇権国家の真実も行き渡りつつある。こ

情報の一國集中は避けるべき

れも、ネットと検索がもたらした大きな「善」といえるだろう。

寡占管理を望むのか

ただ、危惧すべき点もある。クラウドコンピューティング（ネット上で分散管理されるコンピュティンクリソースを使ってデータやアプリケーションをやりとりするスタイル）という流行語に名を借りた情報の寡占化である。

サン・マイクロシステムズのパドポラス最高技術責任者の「コンピュータ群は世界に5つ」グーグル、アマゾン、ヤフー、マイクロソフト、セールスフォースIIあればいい」というコメントを、「期待すべきネットの将来像」という評論家もいる。

だが現実には、世界中の情報を米国の数社が管理するデータセンターに集中させ、それを分析利用する流れになっている。それは果たして望むべき未来なのだろうか？クラウドコンピューティングそのものは正しいとしても、情報は、やはりインターネットの開発主旨に沿って「リスク分散」「寡占防止」を意識し、各国のいろいろなデータセンターに分散させるのが健全な姿だと思われるのだ。

（リンク社長 岡田元治）

|| 木曜日に掲載



《おかだ・がんじ》1955年京都府生まれ。横浜の全寮制、山手学院中高を経て、早稲田大学商学部卒。翻訳・編集・広告制作に従事したのち87年に広告制作でリンクを設立、社長に就任。96年富山市のイーティーワークスと共同でAT-LINK専用サーバ・サービスを開始。専用ホスティングとして国内トップの台数を誇る。